



Title	インタビュー 大阪大学文学研究科 橋本順光教授：風刺漫画から見る、メディアとの距離感
Author(s)	橋本, 順光; 斎藤, 雅泰; 吉田, 唯 他
Citation	待兼山文學. 2020, 13, p. 22-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/86999
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学文学研究科 橋本順光教授

風刺漫画から映画、メディアとの「距離感」

橋本先生は、一八九〇年から一九四〇年まで出版された雑誌、『Review of Reviews』に掲載された風刺漫画を集成復刻した *Caricatures and Cartoons* (『万国風刺漫画大全』全十三巻) を編集されています (図1)。今回が、これまでの風刺漫画、そして現代のメディアと風刺漫画の関係についてお話を伺いました。今、メディアに対する私たちの「距離感」とはどうなものでしょうか。

◆この雑誌が各国の雑誌を作る人の種本になつていて、風刺漫画が使い回されていた。

吉田 まず、風刺漫画を研究されることがなつた経緯を教えていただきたいです。

橋本先生(以下橋本) 結論から言つと、風刺画をやつたのは偶然で、英語圏の資料をリプリントして販売するエディション・シナプスという会社があるんだけど、その出版社の方が何か面白い資料はないですかって言つっていたので、一八九〇年にイギリスで創刊され

◆フランスの時代を示した世界各國の風刺、新聞版面約3,200点を収録。
万国風刺漫画大全
 第4期：第二次大戦へ向かう世界
 【復刻集成版】全3巻+別冊
Caricatures and Cartoons: A History of the World 1931-1940

著者：所蔵：橋本順光(大阪大学文学部)
 2020年10月27日刊行 B5判・巻約1,600頁
 本体+カット版￥138,000(+税) ISBN: 978-4-82166-137-4

●19世紀末から1940年代までの世界の風刺画コレクションシリーズ、第4期第4巻では、第二次世界大戦前の10年間を対象に、世界38ヶ国で刊行された約350紙點から3,200点以上の風刺原画を収録。
 ●主要都市のメイプルからその地図でも最も風刺されたヒトラー、ムソローニや、日本の軍国主義、ガンジー、とインド独立運動などアジアに関する政治家をも含む。
 ●國際政治問題に加えて、教育やスポーツ、文化、景物、女性や人種問題など明治期の読者社会のあるべきを申し出した英米政治家。
 ●シリーズ全13巻で1920年から半世紀の風刺原画18,000点以上を収録。

万国風刺漫画大全 シリーズ目次
 第1周：世纪版換用の世界 全3巻+別冊
Caricatures and Cartoons: A History of the World 1900-1914
 B5判・巻約1,600頁 本体+カット版￥138,000(+税) ISBN: 978-4-82166-136-3
 第2周：戦争の世纪の幕開け 全4巻+別冊
Caricatures and Cartoons: A History of the World 1914-1920
 B5判・巻約1,600頁 本体+カット版￥138,000(+税) ISBN: 978-4-82166-135-2
 第3周：昭和の世界 全3巻+別冊
Caricatures and Cartoons: A History of the World 1921-1930
 B5判・巻約1,600頁 本体+カット版￥138,000(+税) ISBN: 978-4-82166-134-5
 (Edizioni Synapse)



図1

た*Review of Reviews*を提案しました。

十九世紀後半って書つたらシャーロック・ホームズがいい例ですけど、雑誌がたくさん出たんですね。今で言う総合雑誌が生まれたのが一八八〇年代、九〇年代なんです。大雑把に言って、一八七〇年から教育法が何度も改正されて識字率が上がったおかげで一八九

〇年代には読者層が急に分厚くなつた。

日本の明治時代と一緒にです。膨大な雑誌が出版されるようになつたので、十九世紀の段階でもう、当時の人には全體像が見えないくらいでした。それで各雑誌を簡単に要約して、読みどころを紹介する月刊誌ができたんです。だから*Review of Reviews*というのは「雑



図2

メリカとかだけでなく、日本の雑誌の風刺画まで幅広く載せてて、何が起きたか、その国ではどう捉えられているかが手に取るようにわかる(図2)。十九世紀後半に出版された当初は、印刷技術に限界があつて、風刺漫画はそんなにたくさんないんですけど、どんどん増えていつてこの雑誌の田玉コーナーみたいになつた。

誌の雑誌」という意味です。先月の雑誌にこういうおもしろい記事が出てますよというのが挿絵入りで掲載されている。その中で特に人気になつたのが、先月に出た風刺画をよりぬきしたコナーです。しかも、イギリスだけではなく、世界各国の各雑誌の漫画を集めて編集している。フランス、ドイツ、アメリカとかだけでなく、日本の雑誌の

それが非常におもしろくて見ていたら、日本の有名な「火中の栗を拾う」っていう漫画（図3）が載っていた。教科書に必ずあるでしょ。栗を拾えてイギリスにそそのかされて、ロシアが焼いている栗を拾いに行こうとする小さな日本兵が描かれた風刺漫画。日英同盟で勢いづいた日本が、日本とロ

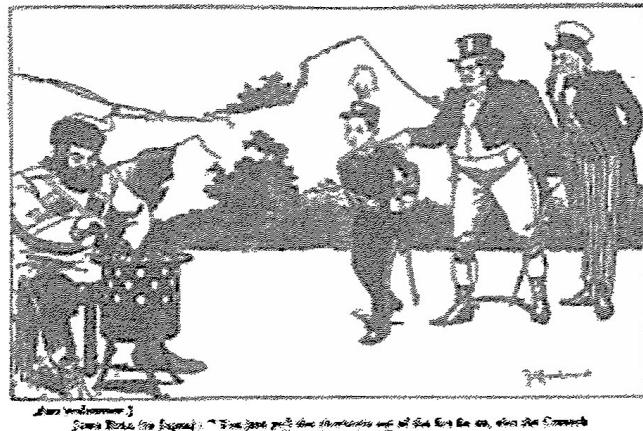


図3

シアとの対立を激化させ、利害が一致する英米は傍観して黙認するという国際情勢を絵解きしている。この漫画が最初、アムステルダムの雑誌に載つていたことはわかつていたんですが、なぜ日本に入ってきたのかよくわからなかつた。それがこの *Review of Reviews* から入手したらしいことがわかつてきだ。それぐらいこの雑誌は、当時の日本じや雑誌を作る人の種本になつていた。日本だけでなく、ドイツ、フランス、イギリスの漫画家もこれを見ていて、パクつたり、パクられたりしている（図4）。そんな使い回しや転用がわかるから復刻したら売れるんじやないかと思つて出版社の人と言つたら、おもしろいですね、やりましょうとなつた。その本の解説を書いているうちに調べていたら、どんどんおもしろくな

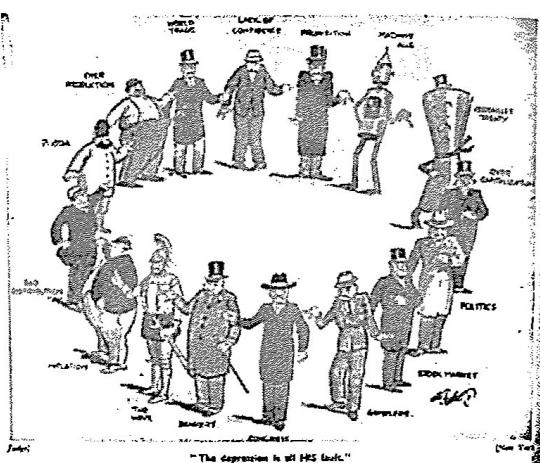
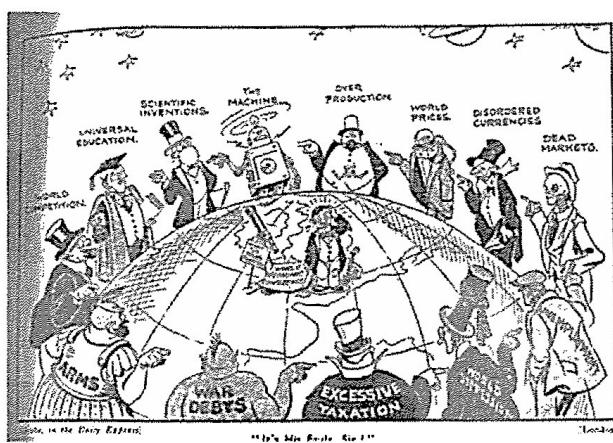


図4

つて、じゃあ次も次もとなつて、そのまま続けて編集して解説を書いていつた。本業じゃないんだけど、ついおもしろくて *Review of the Reviews* の最終巻までやつやつたわけですね。

吉田 「火中の栗を拾う」がそれまで *Review of Reviews* からの転載だとは全く知られていなかつたということですか。

橋本 そのはずです。日本での初出は明治時代の『中央新聞』という新聞なんですね。その『中央新聞』が、日本に「火中の栗」を広めたのは知られていました。その『中央新聞』の記事にはちゃんとアムステルダーメル誌より、と書いてある(図5)。わかりやすく「田」「英」とか書き込んであるんだけど、

じゃあ元はどこから来たのかなんて誰も調べなかつた。それが、偶然 *Review*

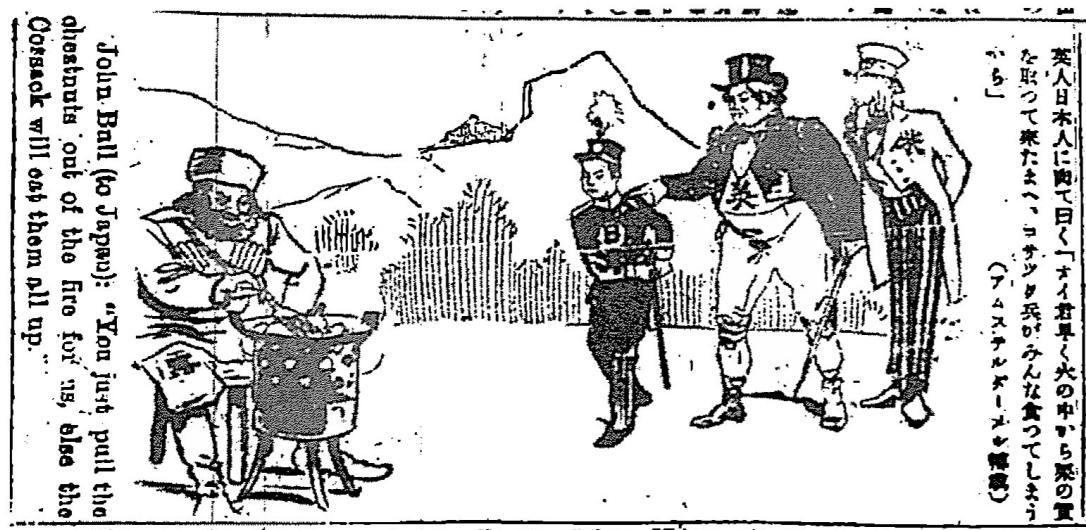
of Reviews を見たら、描いたのは「ランケンシーカークという人気漫画家」ということがわかつた。しかも、当時『中央新聞』の編集部にいた水田南陽は、一

九世紀末に長く渡欧していく、その時のこと

を書いた『大英國漫遊実記』(一九〇〇) をみると、*Review of Reviews*

の編集室に行ってステッジに取材している。それでだいたいの経路がわかつた。ちなみに水田は、この英國滞在時にシャーロック・ホームズにぼれ込んで、ホームズを最初に翻訳した一人になります。

◆英語によるプラットフォームをつくれるはずだと思っていた。



齋藤 *Review of Reviews* についての解説を読ませていただきて疑問に思った

雑誌のまとめ本のような形で基本的に

は無党派で中立ですけど、中心人物のステッドはかなり政治的活動に参加しているから、どのように中立性を担保していましたのかが気になりました。

橋本 ステッド自身は中立を装つてはたけれど、実際には政治的な人で、平和運動に非常に関わった。あとオカルティストだった。ちょっと相反するよう聞こえるけど彼の中ではおそらく同じことで、魂はみんな平等ということですね。十九世紀のスピリチュアリズムは、今の言葉でいうとマイノリティフレンドリーなんです。死んだら魂はみんな一緒で輪廻転生する。つまり魂に人種や男女の区別はないってこと。これは当時としてはかなりリベラルな考え方だつたんです。ステッドは死者とコンタクトをとることにすごく熱心で、その延長で、反戦運動や反帝国主義運動に入り込んでいる。みなさんが教科書で習つたであろうハーグ密使事件を大きく取り上げたのはステッドで、彼が代表権のない当時の朝鮮半島の三人の使節にインタビューをして詳しく記事を書いた。それがハーグ密使事件が知られるようになつたきっかけなんです。さらに、彼は親ロシア派だったから日露戦争には批判的だった。自分の党派性はあつたんだけれども、当時の雑誌とか新聞はもつと党派性が強かつたんですよ。十九世紀の半ばか後半くらいに色分けされて、もう支持政党はすぐれたものと信じていた。彼は今いいう英語中心主義者だから、英語を話す人が増えて世界中の人が英語のものを読み書きして、英語がプラットフォームになれば世界が良くなると信じていた。だから彼は病的とまでは言わないけれども、異様なまでの情熱をかけて

橋本 時代の中で相対的に中立だった齋藤 時代の中で相対的に中立だったと言えるということですね。

はすぐ珍しいです。自分の立場と反対の意見も紹介したり、お互いに対立する風刺画も載せたりした。これは日本本のジャーナリズムでよく言われる両論併記、公正中立性とちょっと似ている。でもこれは、そうやって対立を煽る方が売れるからとすることも否めない。また、ステッド自身は、こういうプラットフォームを作ることで世の中が良くなると信じていた。彼は今いいう英語中心主義者だから、英語を話す人が増えて世界中の人が英語のものを読み書きして、英語がプラットフォームになれば世界が良くなると信じていた。だから彼は病的とまでは言わないけれども、異様なまでの情熱をかけて雑誌を作つていた。この雑誌はのちのReader's Digest (*1) のむとになつている。今だとツイッターのまとめサイ

トに近いかな。だから中立といつても、全然中立じゃないでしょ。

齋藤 選んでいるつていうこと自体が。

橋本 そうそう。自分は一応中立です、と言いながら、でも明らかに傾向を持つてまとめているでしょ。ツイッターと同じです。だから中立性と公平性はある程度妥協できる。今と非常に通じるところがある。

齋藤 ステッドは英語中心主義と同時にエスペランティストでもあったといふのはちょっと不思議な感じがします。

橋本 あれはちょっと眞界の言葉と関係があつて。エスペランティストとかエスペラント語っていうとすごくユートピア主義的なものを私たちを感じるでしょ。

齋藤 当時文学者の間ではやりました

よね。

橋本 そうそう。スピリチュアリストも同じような考え方をしていた。だつておかしいでしょ。イタコとかでもいうじゃない、なんでみんな東北弁なんだつて。あれと一緒に。だから眞界にも共通の言語があつて、それがたまたま、靈媒それぞれの言葉を通じて話していられるんだって言われる。

齋藤 エスペラントはシンプルな、人工言語という特徴を持つてるので、道具のような印象を持っているのですが、スピリチュアリズムはそもそも言語を道具としてみていないと新鮮に感じました。

橋本 そうね、やはりエスペラントがあそこまでブームになつたのは、ナショナリズムや植民地主義に対する危機感をみんな持つっていたからでしょうね。

どの国の言葉を使うかで、上下関係や勢力地図が力をもつてしまふから、国連のような理念や場を作ろうというのが、だいたい十九世紀の後半くらいにできるんです。

齋藤 一時期、国際連盟の公用語になりましたからね。

橋本 そうそう。言葉＝民族が対立を生んでいるから共通言語を作ろうとした。そういうときにはステッドは、英語

がとりあえず今のところ一番うまくいくから英語でいいんじゃないかつて立場。英語をとにかく広めればいい。そういう考え方の人は今でもいるでしょ。

齋藤 無自覚な文化帝国主義みたいなものですよね。

橋本 もちろん文化帝国主義です。英語を広めれば、すべてうまくいくなんてことは決してないんだけど、十九世

紀はまだそういう幻想があつて、イギリスが生んだ民主主義と自由経済は、

英語によつてプラットフォームが作られるはずだ、みたいな。実際ステッドが始めた *Review of Reviews* にすぐ姉妹編のようなものができるんですね。

American Review of Reviews とか *Australian Review of Reviews* とかは日本の『太陽』(*2) という雑誌も *Review of Reviews* を大いに参考にしていた。『太陽』って聞いたことがありますね。

齋藤 『太陽』?

橋本 『太陽』っていう明治時代の総合雑誌があるんですよ。今でいう『文藝春秋』や『中央公論』みたいなものですね。『中央公論』のあとになった『新公論』(*3) っていう雑誌があるんですけど、あれも *Review of Reviews* をおねしている。英語タイトルに *Tokyo's*

Review of Reviews につけてたくらい

で、そのせいかどうか、*Review of*

Reviews からの風刺漫画を無断でたく

さん掲載していた。あと『文藝春秋』

も『中央公論』も一応、党派性がない

ことになつてゐるでしょう。読んでいた

らなんとなく全体が見えるかのような

錯覚が得られるというか、そういう田

配りの良さや勝負をしてゐる雑誌です

よね。*Review of Reviews* という総合誌のあとになつた。

◆概念の擬人化に二十一世紀の私たちは極めて警戒的だが十九世紀まで

は必要な作業だった。

吉田 *Review of Reviews* が色々な記事を要約していく中で、今振り返ると何か抜けていたものがあると解説で書

かれていましたが、何が抜けていると思われたのでしょうか。

橋本 やっぱり十九世紀だと今まで書く

マイノリティ、労働者と女性、子どももですね。それに広い意味での移民。

このあたりは、もう完全に抜けている。

国を一人の一般人で表現するのに全

く疑問がなかつたんですよね。国を一

つの性別で誇張した姿勢の人で代表さ

せる、そういう発想は、今、ないでし

よう。それをすると P.C. (Political

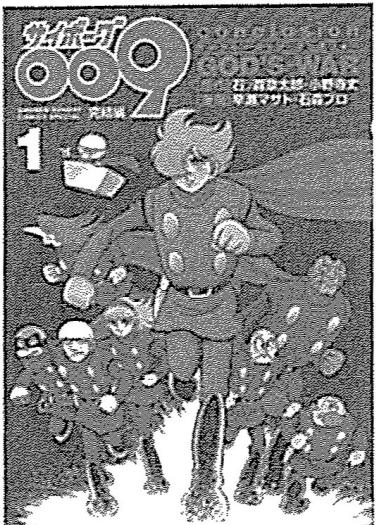
Correctness) 的にアウトだし。皆さんは知らないかもしぬないけど、『サイ

ボーグ009』という石ノ森章太郎の

人気漫画があった(図6)。あれは簡

単に言うと日本を中心とした多国籍軍

なんですよ。日本の男の子がリーダーで、フランスの女の子、中国の男、ネイティブアメリカンの男、イギリスの



四 6

男と、サイボーグが九人いる。それが
まあ全部ステレオタイプなんですね。
フランスの女の子は、いわゆる「紅一
点」でおしゃれなマドンナ、中国の人
はいつも料理してて火を噴いている。
ネイティブアメリカンの男は片言しか
話さない大男。どれもダメでしょ。一
つの国を一人に代表させる場合、あつ
たとしてもあくまで政治家なんです。
首相とか大統領とか、特定の人で表わ
している。いわゆる日本人ってこうだ
よねっていう感じで描くのはほんない。

アメリカについてもトランプは描くけれども、昔のようにアンクル・サムなんていう、星条旗の帽子かぶつた背が高くて顎髭を生やした人物はまず出でない。イギリスだつたらジョン・ブルという、小太りの帽子をかぶつた男がイギリスの代表だつた。火中の栗の風刺画には、アンクル・サムとジョン・ブルの両方が出ていて、ロシアはコサツク兵で、日本は小柄な兵隊として描かれている。こんなふうに擬人化がなんの疑問もなく用いられたのは、十九世紀から二〇世紀ぐらいまででしようね。ある国を男性として表したり、ある概念を女性として表したりすることが、差別や偏見を助長するという発想がほとんどない。そういう問題は、例えれば、目隠しをした女人が天秤と剣を手にしている像。

鷹取 裁判所にある天秤を持つた人ですね。

橋本 そうそう、あれは正義の擬人化。今、擬人化って評判が悪いでしょう。ある種のキャラクターなりキャンペーングのためになんで一定の性別の一定の体型の人ばかり選ばれるんだっていう意見が必ず出てくる。

一同
ああ、
橋本
町なり

橋本 町なり観光なりアピールしたい
ものをどのように擬人化するかですよ
ね。その時、一定層の男の人に強く訴
えるものばかりが選択的に選ばれる。
それで揉めるでしょう。その手法は、
風刺画が広めたといつていい。

齋藤 偶像化とかモチーフ化とかそういうものですか。

橋本 そうそう、そんな比喩ですよ。

て警戒的で、容易に偏見を助長するつていうのが二十一世紀の常識ですけど、十九世紀まではわかりやすく説明するために必要な作業だつた。

齋藤 簡単に理解したかつたんですよ。

橋本 有名な例だと七月革命を率いる女性。女人人が三色旗を持つていて、銃を持つた男たちがおおーって言つてる有名な絵があるでしょ（図7『民衆を導く自由の女神』）。なぜあの女人人は胸をはだけてるのってよく言いますよね。あれは、そうすることで、あらは裸体を恥ずかしがらない、つまり、人間ではなくて、真理や正義を体現しているっていう神話的な意味を持つわけですよね。だから古典古代の美を体現する形で描かれている。一方、付き従う男は、革命に参加した一般人



図7

として、歴史的に正確に描かれている。今はこういう表現はダメですよね。真理や正義を、なぜ一定の民族の一定の体形の女性が代表する必要があるのか、できるのかって、必ず言われるでしょ。だから革命の絵と同じように、地震とか大惨事が起きた時、どの人を被害者

として描くか神経を使いますよね。子供が泣いているところを撮るか、男が落ち込んでいるところを撮るか、老人に注目するか、外国人に注目するか。それであるきり印象が変わつてくる。それを今じゃメディアの方も考えて、慎重に写真を切りとつて載せている。だからアフリカの貧困を訴える写真とかは、誰が紛争とか格差の問題を引き起こしているのかが問題になつてくると面倒だから、いちようにギロツと目を開いた子供ばかりが出てきますよね。

齋藤 そうですね。色んなアフリカ系の、色んな人がいる中で選んでいる。金子 アムリットサル事件の風刺画の意味がちょっとよく分からなくて教えていただきたいです。（図8）

橋本 あれも誰を被害者として描くのかがどれだけ重要かよくわかる例です

ね。一九一九年アムリットサル事件では、イギリスの支配に抗議したインドの人々が虐殺されたんですが、植民地のインドと本国のイギリスでは反応がけつこう違ったんです。現場の方はこれでインドの独立運動を一挙に征圧できると強気だったんですけど、イギリスでは、武器を持たない民衆を虐殺したとして非常に問題になつて。それ



図 8

で実態を調査したのがハンター報告書。このハンター報告が薬として描かれていて、インドの女性がそれを傷口に塗っている。つまり、反英運動が起きて怪我したけれど、それはハンター報告書を読むと治る。報告書を読めば、そんなにひどい事件ではなかつたことが分かるという風な意味ですね。でも実際にはハンター報告によつてむしろ

反英感情が広がつたので、これは薬どころか、毒だつた。これで怪我がひどくなつたと取ると、全然別の意味になるでしょ。だからこの風刺画はイギリスの強圧的なインド支配を肯定しているんだろうけど、今の私たちが見るとむしろ逆にみえる。ハンター報告を塗るとかえつてひどくなりますよと私たちは思つちやうから。これは作り手の意図とは全然別に読まれちやう一例。

齋藤 これが女性なのはなぜでしょ
か？ 植民地は女ということですか？

橋本 基本的に植民地の人は女性ですね。この風刺画でもインドの人々を家にいる女性として描いてる。だから、まるで余計なことして不注意で怪我でもしたかのような印象を与えるでしょ。家のことだけしていればいいのに、分をこえて口出しするからヤケドしたみ

たいな。

齋藤 満州映画とかも一緒ですね。

橋本 全く一緒。李香蘭みたいに、必ず女性として描かれる。支配する日本の方は男性。和製ポカホンタスだからね。そういう奉仕する植民地が女性として描かれるのは、さつきの正しいかどうかを審判する正義＝女性なのと、実は根っこはおんなじ。「男」に正しいことを保証し、その「男」に奉仕するから。そもそも映画だと、コロンビアという映画製作会社の映画つてオープニングにたいまつを持つ女性が出てくるでしょ。これは映画が今みたに高尚なものと思われていなかつた時に、映画は文明を照らす光という意味でたいまつを持つてる。これはアカデミー賞も同じで、別に学術でもなんでもないのにアカデミーって言うでしょ。ヨ

ーロッパとかの芸術院みたいな権威付けをするためで。

鷹取 風刺画で女性が揶揄されていたのは、やっぱり風刺画を見るのが男性中心だったからでしょうね。

橋本 まあそうでしょうね。少なくとも風刺画の中で女性はステレオタイプばかり。

一九二〇、三〇年代になると女性の社会進出が進むから、働く女性をあざ笑う風刺画がたくさん出てくる。あと恐妻家もの、いわゆる蚤の夫婦的なものもある頃に出るんですね。チヨウチンアンコウみたいに女性が大きく描かれて旦那の方はものすごく小さい。それで女性がガミガミいって、男が縮み上がるみたいなのが出てくる。女性の社会進出と権利の主張を嘲笑する漫畫がどつと描かれるのが一九二〇、三〇年代。

それが戦争が近づくと良妻賢母を推奨するのが増えてくる。たとえば一九三八年、イギリスとの開戦前夜のドイツの政府寄りの雑誌で、イギリスがついに人口問題に注目するようになつたという内容の漫畫（図9）。イギリス国旗の柄のビキニを着たブロンドの髪の

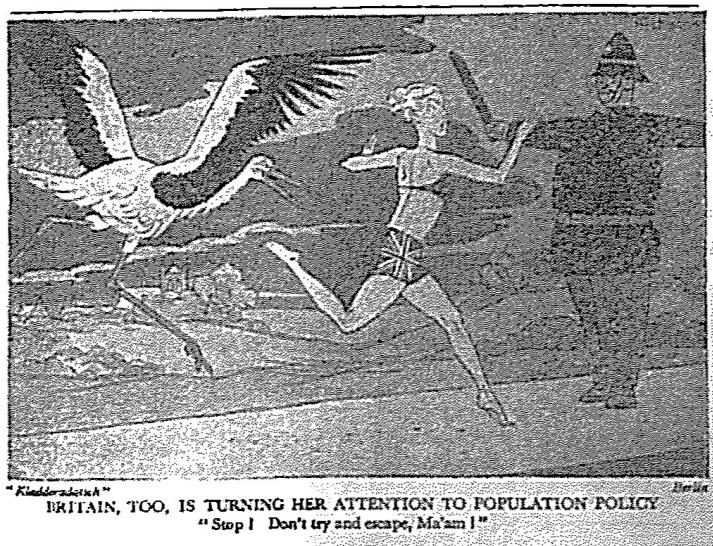


図9

短い女性が、コウノトリに追いかけられて走っているところを、警官が「止まりなさい。もう逃げちゃダメですよ」と言つてはいる。モダンな女性に子どもを産むことから逃げて遊んでぢや、もしくは働いてぢやダメですよ、これらは子どもを産みなさいっていう意味。重要なのは、この漫画がすでにそういうキヤンペーンを張つていたドイツで出たこと。ナチスの優生学的な政策は聞いたことがあるでしょう。健康なアーリア人種の子をたくさん産みなさい、そうでない子どもは殺しなさいといって、障害者とか同性愛者たちがたくさん殺されて、その延長にユダヤ人を絶滅させようとアウシュビツができたつていうのは聞いたことがあると思いません。今、そういう風にした方がいいんじゃないかなって平氣で言う人がいる

でしょ。でも、「健康」の線引きは簡単でできないし、いつだって誰だつて「劣っている」状態になりうるっていうのは分かりきつたことですよね。この漫

◆メディアに書かれる内容よりもそれによつて何を言いたいのかに私はちは関心を持つ。

画で興味深いのは、今さらながらイギリスがドイツみたいなことをしだしたと指摘していること。つまり、イギリスは本気でドイツとの戦争を考え出したていう、ドイツ国民への引き締めであると同時に、ドイツはもう前からやつててるから大丈夫ですよねっていう戦意高揚のプロパガンダなんです。今と一緒でしょ。女人が生意気になつたからとか、社会進出するから子供が減つてるんだつていうことを平然と言つて、人がいるけれど、そのほほ原形が戦争前夜に出ている。

橋本 *American Review of Reviews* & *The Strand Magazine* (*4) はインターネットでほぼ全部見れるから是非ご覧ください。The Strand Magazine はシャーロック・ホームズが連載された雑誌で一八九一年に創刊されました。あれを見たら今の雑誌がどうやつて生まれたかがよくわかります。ばらばらな話題の記事が、写真と挿絵をいっぱいにして並んでてどこからどう読んでもいい。識字率が上がつて印刷技術が進歩して中産階級が出てきて、政治問題を長文で論じる挿絵なしのそれまでの雑誌とは全然違う。政治よりは面白い雑学を共有する方がいいという、私

たちのような中産階級が生まれたのと一八九〇年代の雑誌はぴったり一致する。だから、いろんなデータベースや雑学を駆使するホームズは、まさにそんな情報満載の雑誌に連載されたわけである。ホームズのように、情報を総覽する

るというか、大きく雑誌や新聞の傾向

齋藤 時代に応えたということでしょうか。

橋本 そうそう、今で覗うまとめサイトですよね。「NAVER サム」だったつけ。Togetterとかってツイッターでも必ずあるでしょう。あれと全く一緒。いちいちは付き合いたくないけれども大体どんなことがあるかは知つておきたい、というのはみんな持つてるでしょう。ネタバレサイトとかね。おんなじことが印刷物が爆発的に増えた十九

たわけ。社会問題や国際関係とかね、ぱつと見て分かるでしよう。それでお互いにネガティブキャンペーンをやるから、みんなこぞって新聞雑誌を買つた。

齋藤 中間層が出現して、中間層が風

現代ってマジョリティーがないとか分裂してるとか言われていると思います

そういう風に変化したのか、そもそも現代に生きているのでしょうか。

橋本 特に現代の日本では、この頃のような影響力のある風刺画はほとんどないです。今じゃ、ツイッターがそういう役割なんじやない？ 社会状況なり国際情勢というのを百四十字で極論することで分かつたような気にさせて

くれるでしょう。あれを見ているとな
るとなく分かつた気になる。そのため
だけに存在してると言つてもいい。風
刺画みたいのはむしろツイッターで
分析するネタになってしまった。これ
つて要はこういう意図があるんだよね

とか宣伝が見え見えだとか。

橋本 そう。一回転したっていう感じ。
くなつてしまふということですか？

風刺画とかに対しで、私たちは良くも悪くもメディアリテラシーを身につけていたというか、メディアに書かれている内容そのものよりも、それによって彼らが何を言いたいのかの方に関心を持つでしょう。要はお前それでマウンティングしたいだけじゃん、とか。それで要は自慢だよねとか。全てをそうつて要は自慢だよねとか。全くをそういう「本音」に換言することが分析す

そうすると全て分かつた気になつちゃいますよね。ある種、悪しきフロイト主義に毒されると言えるかもしい。つまり、本音ではこういうことをしたいのに、その代償として何かを書いている、作っているという風に見てしまう。そのもの自体を見ることよりも、それによつてこの人は何を言おうとしているか、それによつて私は何を言えばいいのかばかり考える。

齋藤 見る態度が変わつたということですね。これはやはり風刺画ができるから時間が経つたからなのでしょうか。

橋本 そうそう。もの自体をそのまま受け取るのではない。それこそ一九九〇年代ぐらいから私たちはものに対する見方ががらつと変わつた。これは批評理論では言語論的転回とか作者の死

とか色々な言い方をするけど、書かれたものというものは書いた人の無意識な欲望が出ていて、だから書かれたものは書いた人の意図とは別に、受け手が自由に解釈できる。こうした受け手優位が今の常識になつているでしょう。この考え方はもともと一九六〇年代ぐらいに現代思想とか批評理論から広まつたんですね。構造主義とかがそうですが、私たちは自分の意志で発言しているのではなく、組み込まれた言語や社会の構造という限界のなかで発言させられていると考える。ポジショニングがまさにこれ。ポジショントークといふのは、構造主義を意識した開き直りでしょ。どうせ発言が立場によつて規定されているつていうなら、そしてそういうわれるなら、すべてがポジショントーキーになつてしまう。

齋藤 話す内容じゃなくて話す立場に目が向けられるということですか？

橋本 そうそう。「あ、お前はその立場ね、わかるよお疲れ」。そういう風に見てしまう。

齋藤 それが今ツイッターの雰囲気なんですね。

橋本 それはそれで楽しいわけ。書かれたもの自体を細かく見ることなく、「その人はこれによつて何を言おうとしているか」のみに注目する。だから百四十字でいいんですよ。逆にこの仕組みだと、どうしてもそうなる。だから自分からは何もしないで、相手にからむのが一番強いんですよね。

齋藤 そうですね。さぐられることがないから。

橋本 風刺画がなにかをプロパガンダするとき、省略や誇張がそこに隠され

35

てはいるということが自明になつた。つまり、何かが書かれる時は必ず何かが書かれていない。例えば政府の広報漫画を見たとき私たちはすぐ、ここで何が書かれていないか、これによつて何を隠そうとしているかという方を考えるでしょう。書いている人と書かれている相手の文脈を考えないと読めない。構造主義の弊害とは言わないのである。

ポスト構造主義の典型的な見方ですよ
ね。皮肉なことに、そんな広報でおな
じみの嘘くさい図をポンチ絵というん
ですよ。これは官公庁でキャンペーン
とか法案を作る時に、その概念図や仕
組みを描いたもののこと。

斎藤 パワー・ポイントみたいなものですね。

橋本 そうパワー・ポイントにでてくるなんだかわかつたような気にさせる圖

あれなんでポンチ絵っていうかといふと、『パンチ』(*5) っていうイギリスの風刺漫画の雑誌に由来している。一八四一年に創刊されて、世界中でまねされたおかげで、パンチといえば風刺画の代名詞にまでなった。それで明治の日本でも落書きみたいな漫画をポンチ絵って言うようになつて、さらに官公庁とかでこれで事態は好循環するつて無理やりまとめた絵をポンチ絵とふざけて言うようになつた。現に、今の私たちはポンチ絵を素直に見ないでしょ。風刺画みたいに、何かが隠されてるんじゃないかつて疑う。その点でまさに現代の風刺画。

あれなんでポンチ絵っていうかというと、『パンチ』(*5)っていうイギリスの風刺漫画の雑誌に由来している。一八四一年に創刊されて、世界中でまねされたおかげで、パンチといえば風刺画の代名詞にまでなった。それで明治の日本でも落書きみたいな漫画をポンチ絵って言うようになつて、さらに官公庁とかでこれで事態は好循環するつて無理やりまとめた絵をポンチ絵とふざけて言うようになつた。現に、今の私たちはポンチ絵を素直に見ないでしょ。風刺画みたいに、何かが隠されてるんじゃないかつて疑う。その点でまさに現代の風刺画。

にしていいと開き直るのが常態になつてしまつていて。でも仕組みは十九世紀とそんなに変わらない。結局ツイッターとかプラットフォームとなるネット業界が儲かっているのは、印刷業界が儲かっていたのと一緒。英語圏を中心にしてプラットフォームを作つたものが勝ちだつていうのは全く変わつてない。ただそれが意識されるかどうかは別の話だけど。今のいわゆる「情報化社会」つて、ディストピアというかユートピアですよね。みんながプラットフォームを共有できていると錯覚することで、どれだけ分断していくても、みんなの仲が険悪でも、たとえイライラ

齋藤 とすると、ステッドが目指した「公平に中立なもの」はもう存在しない
橋本 いつてことなんですか。

にしていいと開き直るのが常態になつてしまつてゐる。でも仕組みは十九世紀とそんなに変わらない。結局ツイッターとかプラットフォームとなるネット業界が儲かつてゐるのは、印刷業界が儲かつていたのと一緒に。英語圏を中心にしてプラットフォームを作つたものの勝ちだつていうのは全く変わつてない。ただそれが意識されるかどうかは別の話だけど。今いわゆる「情報化社会」つて、ディストピアというかユートピアですよね。みんながプラットフォームを共有できていると錯覚することで、どれだけ分断していくも、みんなの仲が険悪でも、たとえイララバっかりしててもとにかく退屈はしない。こつこつ書いたり、じっくり読むことより、手軽にマウントや共感を手

くなるよなあ。

齋藤 情報を追えている気がしちゃいますからね。

橋本 コンテンツつていやな表現があるけど、風刺画だけじゃなく、本も映画もみんなコミュニケーションのための埋め草というかツールになっちゃつた。まとめサイトみたらわかった気になるし、それでガヤガヤする方が樂しいって感じでしようね。

◆ちょっと変えたら正反対の立場でも使いちゃうところが風刺漫画の面白くて怖いところ。

ないものはまず取り上げない。

齋藤 今はどういったものを風刺画は題材にしていると思いますか？ 単純化してステレオタイプ化することを拒否するのが現代。一方で、現代でも一

枚で分かりやすく知りたい理解したいという欲望はあるなら、風刺画の題材は政治家以外にあるのでしょうか？

橋本 政治家は一番やりやすいですけど、どこに注目するかというのは変わった。今じゃ、政治家を描く時に、女が「男の園」の秩序を乱したなんて絶対描かないし、身体的な特徴とか誇張するにしても偏見を助長しないようにする。障碍とか病気とかどうしようもないものはまず取り上げない。

でも、効果的に問題や構図をわかりやすく切り取って印象付けるという風刺画が発達させた手法は、今もよく使われている。十九世紀だと、異分子を招かざる客として強調したように、今ではダイバーシティを強調する技術が発達しているでしょう。皆さんなら、あのオープンキャンパスの嘘くさい写

真を見たらわかるはず。私たちはジエ

ンダーフリーでエスニシティとか差別とかにとらわれず、こんなに開放的な

キャンバスですよというメッセージ。

いまじや多くの大学のセキュリティが厳しくなって、ふらっと研究室を訪ねるなんてできなくなつたから、そのぶん開放日を設けただけで。基地とかと一緒にで、地域の住民や高校生に親近感をもつてもらわなくちやならないから。

齋藤 十分機能していますね。

橋本 伝えるべきメッセージが変わつただけで方法 자체は実は変わってないんですね。今広告を作っている人はそういうのを計算し尽くして作つてんじゃないかな。十何秒しかないCMや、一枚のポスターでも、今はネットだといつまでも残るし、拡散しちゃうから神経使つてるでしょ。

齋藤 現代の風刺画は、シャルリーエ

ブド事件とかバンクシーが印象的です。

アベノマスクとかはツイッター上で風

刺画として描かれてそれ自体に賛否両

論の騒動があつたりしましたが、そう

いった事件についてどういう風に思

りますか？

橋本 新聞や雑誌が主な発表の場だつ

た風刺画は、今じゃ姿を変えて生きて

いると思いますね。アベノマスクはそ

の一例でしよう。誰が言い出したのか

気にしないままに、あつという間に政

権を要約するスローガンとして広まつ

たのは、日本の落首（らくしゅ）や落

書（らくしょ）とよく似てる。アベノ

ミクスからアベノマスクへというと、

後世の教科書に写真が載つて、受験生

がみんな語呂合わせで覚えるみたいな

見事な出来。

ただ風刺画の場合、政権に批判的か

同調的かという内容より、広報という

か広告の手法が重要だと思うんですね。

広告は国の宣伝であるプロパガンダと

関わりが深くて、電通が元は満洲で広

報と情報の会社だったことはよく知ら

れています。こうしたつなが

りは日本に限った話ではなくて。有名

な例だと、ドイツのレニ・リーフエン

シュタール（*6）という女性の監督が

いるんですね。この人はプロパガンダ

の話の時によく議論されるけど、彼女

が一九三四年にナチスの党大会を撮影

した『意志の勝利』と、一九三六年の

ベルリンオリンピックを撮つた『オリ

ンピア』は、その後のあらゆる広告や

ポスターの原点になっているんです。

『オリンピア』は演出や再現映像もい

とわず、スポーツ選手をどう撮つたら

一番絵になるかという原型を作つた。

ナチスの党大会も今見ると別に大した

ことないけど、それはあれから洗練さ

れたからであつて、手法は今のコンサ

ートのライティングと同じ、ジャニー

ズの嵐とかの。

齋藤 演出みたいな。

橋本 そうそう、嵐でおなじみの音と

光の使い方はあの頃に原型ができるが

る。彼らの登場の仕方って、軍服っぽ

い恰好で音にあわせてじゃーんと出て

きてサーチライトみたいのがバーツ

と当たりますよね。あれはロックとか

ポピュラー音楽のコンサートとかにそ

のまま使われた。二十世紀フォックス

の映画だと、パンパカパーンっていう

冒頭のファンファーレで、20つて書

いた巨大な彫刻にサーチライトが当た

るでしょ。あれは一九三五年から始ま

つてて、『意志の勝利』の影響かどうかはともかく、ああした敵襲を思わせる映像が、立場が正反対の映画会社の娯楽でもとても好まれた。

齋藤 一般的なメディアからプロパガンダだった訳じやなくて、プロパガンダからいわゆる一般的なメディアに導入されたんですね。

橋本 それは作り手がほぼ一緒だから。プロパガンダ映画を作る人が、戦争が終わつたりした後、娯楽映画を作るし、あるいは逆に娯楽を作つてプロパガンダに行くから、そりや同じになる。円谷英二とか東宝がいい例ですよね。東宝つて戦時中は、軍の全面協力で国策映画をたくさん作つてたから、その縁で今も自衛隊が協力した映画をよく撮つてる。円谷はゴジラとか特撮映画の神様として聞いたことがあると思うけ

ど、彼がそういう特撮で最初に才能を発揮したのは、真珠湾攻撃を扱つた『ハイ・マレー沖海戦』(*7)です。アメリカの観客がなんでこんな映像が残つてるんだって勘違いした伝説がある

くらいの迫真の出来。その円谷が戦後、空襲そつくりのゴジラの攻撃に苦しむ東京を特撮で描いた。ゴジラシリーズを見ると、戦争映画の時の技術がそのまま使われていることがわかる。作り手が同じだからそれは当然のことだ。

作り手はその時に受ける形でつくっただけともいえる。

漫画も同じで、戦時には戦争協力の途端にアメリカ万歳、民主主義万歳の漫画を書いていたのに、戦争が終わつた途端にアメ横にアメ横、アメ横にアメ横の漫画を描いている。だって描き手が

ただ上手いからずつと使われる。あの人が巨人と阪神の両方の応援歌を作つてるのは有名な話。イデオロギーとか考えず、その時に受けるものにベストを尽くす。だからこそ作家や作り手の書き手にもそういうところの出身だという意識があると思うんですけど、現在の書き手は自分の政治的なものは無意識で書いているかもしないと思ひます。その場合だとやっぱり違いますよね。

橋本 それこそ朝ドラの『エール』の登場人物のモデルになつた古閑裕而(*8)という作曲家は、戦前は軍歌をたくさん作つて、戦後は応援歌を作つて。応援歌つて軍歌と一緒にやん。ただ上手いからずつと使われる。あの人が巨人と阪神の両方の応援歌を作つてるのは有名な話。イデオロギーとか考えず、その時に受けるものにベストを尽くす。だからこそ作家や作り手

の手の専門家のデータや技術はみんな欲しかつたりする。

齋藤 それは時代性があるので、当

の戦争責任はすごく難しい問題。どこ

まで信じていたのかはなかなかわから
ないし、軍事技術と民間への応用とい
う関係と似てる。

齋藤

今と同じようにそれで食べていい
訳ですからね。

橋本 そう。でも、だからといって免

罪できるかというと、そんな単純な話

じゃない。かと言つて、それはけしか
らんと言うだけでも片付かない。ちょ
つと変えたら、戦後も使えちゃうわけ

ですから。それが風刺漫画の面白くて
かつ怖いところだと思います。立場が
違つてもちょっと変えたら、そのま

ま敵の方にも使えちゃう。

齋藤 確かに黄禍論と黄福論の風刺画
がすごく面白かったです。

橋本 そうですね、Review of Reviews
に載つていた、東洋人が攻めてくるつ
ていうドイツの黄禍論を描いた風刺画
(図10)が『新公論』の表紙になつたん



図 10



図 11

だけど、その風刺画への反論として同書内に掲載された漫画(図11)では、白熊たちのロシアという悪の帝国は恐れをなして、むしろ黄色人種は幸福をもたらすのだという風に、意味をくくるんと反転させている。あと傑作は、中国の側から、戦艦で攻めてくる欧米



A New Edition of the Kaiser's well-known Cartoon
Cartoon: "People of Asia, defend your native gods."

図 12

の脅威を描いた風刺画(図12)。これを描いたのは、例の「火中の栗」を描いたオランダのブランケンシーカーです。こういった風刺画の仕組みに興味を持つたきっかけがあつて、言おうかどうか迷つてたんですけど、それが相原コーディと竹熊健太郎の『サルでも描けるまんが教室』(図13)。一九九〇年代初めに出た小学生向けの漫画入門のパロディ。ジャンル別に漫画はこういうパターンがあるので、こうした戦略が可能みたいなことが書かれてる。その中で、受けるPR漫画の描き方というものがあるって。下品で申し訳ないんだけど、出ている例が包茎手術推進法案のPR漫画を描くとしたら、というものの。包茎手術をした方が良いという政策が決まつたら、どういう漫画を描けばいいのか、竹熊健太郎という編集者

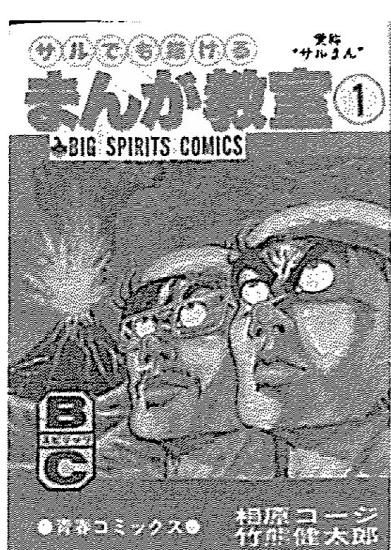


図 13

が相原コーディという漫画家に指南している。そういうのを描けばいいという例が挙がっている。すごいのは、そのあと必ず法案反対グループができるから、今度は反対グループに向けて包茎手術推進反対PR漫画を描いてみせるところ。それがまったく同じ絵で、台詞だけ変えたもの。なのに、まったく違和感がない。これを読んだ時、私は二十歳くらいだつたんだけど衝撃でしたね。これ戦争漫画と同じなんです。茶化してあるけど、風刺漫画でよく言われたこ

とと同じ。近藤日出造（*9）という有名な人がいるけど、戦前に戦争協力を描いて、戦後にがらつと立場を変えて、漫畫界の長老になつた人。アメリカ批判の漫畫をちょこつと變えるだけで、政權批判とか正反対の立場に使うことができる。このPR漫畫は下品な例だから使いにくいくんだけど、風刺漫畫の本質を突いていて、いつかこういうことを研究したいなと思ったのがきつかけだつたのかもしれません。

◆今の風刺漫畫の残念なのは、政治的なことを話題にしたりお笑いにする文化が発達しなかつたから。

吉田 日本の新聞をバラバラ見ていてと風刺画が載せられていますが、あまり興味を惹かれないと。いやあ

海外の風刺画はどうなのか、風刺漫畫の扱われ方は国によつてどう違つてくるものなかなと思います。

橋本 元々、新聞の風刺漫畫つて看板の漫畫家が描いていた。イギリスだと一九二〇年代ぐらいに大体そういう看板漫畫家の仕組みができて、それぞれの雑誌の政治的な立場に合わせて、分かりやすく政治問題を絵に描いたり茶化したりする専属漫畫家ができた。わかりやすい社説みたいなコメントを書くコラムニストに近いかもしれないですね。

吉田 一人の記者っていう感じですね。橋本 そう、他の人にはない、機知に富んだ方法で時事問題とか日常生活を風刺する、という位置付けだつたんですよね。いまの日本の新聞の風刺漫畫

橋本 元々、新聞の風刺漫畫つて看板の漫畫家が描いていた。イギリスだと一九二〇年代ぐらいに大体そういう看板漫畫家の仕組みができて、それぞれの雑誌の政治的な立場に合わせて、分かりやすく政治問題を絵に描いたり茶化したりする専属漫畫家ができた。わかりやすい社説みたいなコメントを書くコラムニストに近いかもしれないですね。

吉田 そういうのあまり見たことないでしょ。橋本 そうです。ウーマンラッシュアワーは話題になりましたけど、そのくらいしか見たことがないです。

吉田 日本の新聞をバラバラ見ていてと風刺画が載せられていますが、あまり興味を惹かれないと。いやあ

ど、公正中立つていう考え方があるせいだと思うんですが、図式的なところに落としこむばかり。だからあんまり面白くない。図式が決まつて意外性や毒がないし、こういう見方があるんだ、というような新鮮さもない。明治大正にはそれなりにあって、『パンチ』みたいな風刺漫畫専門の雑誌もあつたんだけど、それがすっかりなくなつたのが今の風刺漫畫の残念なところ。多分、政治的なことを話題にしたり、それをお笑いにする文化が発達しなかつたっていうのも大きいんでしょうね。

吉田 そういうのあまり見たことないでしょ。橋本 そうです。ウーマンラッシュアワーは話題になりましたけど、そのくらいしか見たことがないです。

橋本 そうそう、ウーマンラッシュアワーぐらい。英語圏では結構多くて普

通にある。一九七〇年代、私の子供の頃ぐらいはまだ日本にもあった。

齋藤 例えはどういつたものがありま

したか？

橋本 田中角栄とかみんな真似してた

よ。

一同 あー。（笑い）

橋本 タモリとかが過激で、「まあこのー」とか言つてみんな真似したの。大平正芳首相（＊10）の「あー、うー」なんて口癖もそう。一九八〇年ごろに描かれた手塚治虫の『マコとルミとチイ』にも、そんな一コマがあつて、実際、ああいうおふざけは多かつた（図14）。政治家を茶化すつていうのは結構あつたんですね。今からうじてNHKの「ライフ」っていう番組に「宇宙人総理」があるけど、あれがほぼ唯一で。私は地上波であれ以外見たことがない。



図14

◆再掲載にうるさかつた『パンチ』は結局、時代遅れになつた。

金子 私の想像する風刺漫画は個人の特徴とかを強調するものなのですが、『パンチ』に掲載されている絵は普通に写実的なものが多いなと思って。それは、わかりやすさを追求していたらそうなつたということなんですか？

橋本 『パンチ』は、写実的な絵を描く作家がすごく多かつたんです。そもそも『パンチ』に寄稿していたのは漫画家としてよりも画家になりたかつた人が多い。だからアカデミー絵画コンペレックスみたいなのがあつて、女性を悪くするつて言うか、波風立たせるというか。だからそういうのを笑いにするということ自体、ここ十年全然ないんじゃないですか。

古典絵画のプロポーションで写実的に描く人が多い。写真をトレースする人も多かつたし。皆さんのが一番よく知っているものだと、『不思議の国のアリス』

の挿絵を描いたジョン・テニエルが、『パンチ』の常連漫画家。あの女王様の絵とか誇張してるけど、リアルに精緻に何本も線を描き込んでいく。それだけに『パンチ』は使用料が高くて、再掲載にうるさかつたんですね。だか



図 15

ら Review of reviews に『パンチ』はほとんど載っていない。他の新聞や雑誌だと、どちらかというとメッセージのほうが重要だから、再掲載にそんなにうるさくなかった。それで結局、『パンチ』は時代遅れな絵になっていく。今の日本の風刺漫画みたいに、さらさらっと少ない線で輪郭を中心に描く書き方は、一九二〇、三〇年代くらいに世界中で定着したんですね。デイヴィッド・ロウ (* 11) っていう漫画家がイギリスにて、その人が政治漫画のお手本として広まって、今の新聞漫画の原型になっている（図 15）。

◆戦前の町内日常漫画と今の四コマ
ほのぼの漫画は不気味なほどそつくり。

ら Review of reviews に『パンチ』はほとんど載っていない。他の新聞や雑誌など、どちらかというとメッセージのほうが重要だから、再掲載にそんなにうるさくなかった。それで結局、『パンチ』は時代遅れな絵になっていく。今の日本の風刺漫画みたいに、さらさらっと少ない線で輪郭を中心に描く書き方は、一九二〇、三〇年代くらいに世界中で定着したんですね。デイヴィッド・ロウ (* 11) っていう漫画家がイギリスにて、その人が政治漫画のお手本として広まって、今の新聞漫画の原型になっている（図 15）。

橋本 『いじわるばあさん』は面白いよね。家族幻想がなくなつた今は、『ザエさん』より『いじわるばあさん』こそ読まれるべきだね。独居老人の意地悪さと孤独が本当によく描かれてる。齋藤 でも結構ひどいのはありますよ。橋本 うん、笑えないくらいひどいのもある。でも今見ると、ああいう暴走老人が現実になつちやつた。長谷川町子の地は『いじわるばあさん』に出てると思うんですよね。

齋藤 新聞の政治欄にある風刺漫画の一コマ漫画と別に四コマがあるじやないですか。そもそも普通の漫画といわゆる風刺漫画の違いってどういうものなんでしょうか。僕は長谷川町子の『ザエさん』とか『いじわるばあさん』が好きなんですが……。

てないじゃないですか。

橋本 そうね、いじわるばあさんが、

敬老の日にいろいろイベントに出て、

しょせんは若い者の自己満足さ、つて一人でつぶやくところとか。子どものときに見て今でも覚えているのは、酒とか飲まずに規則正しい生活を何年もしてきたっていう老人を、お爺ちゃんお婆ちゃんの会で紹介してて、みんなが秘訣を聞きたがると、オチはずつと刑務所にいたからっていう。だけど今の新聞の四コマ漫画は面白くないでしょ。

齋藤 面白くないですよね。

橋本 炎上するのが怖いからだろうね。

こんなのが出てましたよってツイッターにあがつて作者は何を考えているのか？ となるのを一番恐れているんだと思う。

齋藤 前までは四コマ漫画は普通の漫画だけど風刺も扱うというくらいで、風刺漫画とまでは言えないですね。

橋本 四コマ漫画はけつこう社会への異議申し立てとか多かつたんだけど、最近は、家庭漫画一色。でもそれはそれで、お上には文句をいわずに、家庭や町内でなんとかするつている戦時中のプロパガンダと似てるんだよね。こ

のあたり大塚英志という研究者が『大政翼賛会のメディアミックス』という、政翼賛会のメディアミックス』という、すごく面白い本を書いている(図16)。

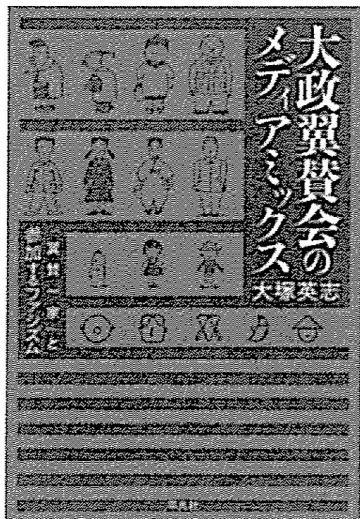


図 16

それによれば『翼賛一家』っていう漫画があつたんですよ。

齋藤 『翼賛一家』？

橋本 そう、みんなで大政翼賛するぞつていう一家の漫画があつたんです。

お父さんがいてお母さんがいて子供がいて、町内がみんな仲良くて。もうピント来るでしょ。『サザエさん』とつくり。しかもこれコピーライトフリーなの。そのキャラクターを使って好きに描いていいよっていう漫画。宮尾しげを(*12)が一九六七年に出した『日本戯画』をみると、一九三〇年代に『スピード太郎』という日本最初のストーリー漫画を描いたといわれる宍戸左行が描いているくらい(図17)。ほかにもいろんな漫画家がそれをネタに描いていて、それがレコードやラジオ

ドラマになつてて、日本最初のメディアミックスになつたらしい。『大政翼賛会のメディアミックス』によれば、その延長に出てきたのが『サザエさん』というわけ。たしかに『翼賛一家』と『サザエさん』は相互に監視する『隣組』(*13)とおんなじ。あんな仲いゝ近所、今あつたら面倒くさいでしょ。



図 17

もちろん今と完全に繋がつてゐる訳じゃないけど、戦前のそういう政治に口を出さない町内日常漫画と、今の四コマのほのぼの漫画って不気味なほどそつくり。

齋藤 完全に線引きできる訳でもないんですね。

橋本 そう、完全に線引きできない。昔は漫画は、手塚治虫が戦後に始めたていうふうに、戦争で区切つてたけど、今の研究じや否定されてるでしょ。手塚治虫的なストーリー漫画は戦前にもあつたし、手塚治虫も戦前的な漫画をすごく引きずつてるし、かなりそこには連續性がある。もちろんストーリー漫画は四コマ漫画や風刺漫画よりも、カートゥーンという形で一九二〇年代ぐらいにアメリカとかで発展するんです。皆さんどこかで聞いたことがある

と思つてますけえ、*Bringing Up Father*(*14)とか『タンタンの冒険』(*15)とかがあつたりする。要はそういう続き物漫画が出て、似たようなものが戦前からあつたんですね。基本的にコマ割りはすごく単調なんんですけど、それを動かしたのがディズニーのアニメーションですね。

◆過剰な暴力性で弱者をつるし上げる怖さと、不満のガスを抜くだけでは現状を肯定してしまう弱さ。

吉田 風刺画の弱点は何か考えた時、時間の流れやプロセスを一コマとか四コマつていう短さだけでは描き切れないところがあるかも知れないと思つたんですが、風刺画の短所についてどう思いますか。

橋本 そうですね、風刺画の短所は、大雑把に言つて弱者を差別するところと、ガス抜きにしかならなくて現状肯定になつてしまふところと、二つあります。これはヨーロッパの風刺画の起源が、イギリスとフランスにあるところと関係があるんです。

フランスの場合は、フランス革命がきっかけだったんです。フランス革命で言うネガティブキャンペーンみたいな形で描くのがすごく流行ったんです。リン・ハントというアメリカの有

名な研究者が『ポルノグラフィの発明』という、日本でも翻訳のある論文集で詳しく指摘したんですね（図18）。そもそもポルノグラフィというのは非常に政治的なわけです。女性であろうが男性であろうがLGBTQであろうが



图 18

ある種のシチュエーションに欲情するのはおんなじ。それも政治的なものや支配関係の逆転の物語に多いですね。現にどのような人たちがどのような人たちにどう欲望して、それをどこまで認めるのかというのを非常に政治的でしょ。ある種のものはすごく許される。異性愛はすごく推奨されて、結婚に至るもしくは性的な交渉を至る物語を私たちは膨大に生み出している。でもある種の性的な傾向を持つ人達についての物語はほとんど作られないし、

むしろタブーとされている。私たちが当たり前と思つてるものに意義を申し立てたり、そういう価値觀を転倒させるこという点でポルノグラフィは非常に風刺画的な、強い価値の転倒を引き起こすことがありますね。マリー・アン・トワネットもいい例で、多情な女がのさばりやがつて、という反感にぴったりはまつたんです。革命を煽る際に、アントワネットを標的にするといい感じで炎上した。大事の前で弱者に焦点を当てて、風刺画で誇張することで良くも悪くも大きな運動が生まれてしまう。

一方、同じ十八世紀のイギリスでは、フランスをバカにしたり、イギリスの国王をこつびどく風刺する政治漫画が流行した。ナポレオンと地球を分割している政治家のピットを描いた風刺画

や（図19）、でっぷり太って酒色におぼれるばかりの皇太子時代のジョージ四世を描いた風刺画はどこかで見たことがあるかもしれません（図20）。どれも十八世紀末から十九世紀にかけて活躍したジェイムズ・ギルレイ（*16）の代表作です。議会が強くなつて国王の力が骨抜きになつていったから、どれだけ国王を風刺しても革命を起こす



図 19



図 20

ほどのことは必要ない。あくまでこれつてあれだよねと言つてあざ笑う。言いかえれば、風刺される対象が権威として揺るがないから、それを誇張して批判すると笑いの対象になるわけ。だからこの手のイギリスの風刺画は基本的に現状肯定。笑い者にすることで解決した気になつてしまふ。

こうした風刺漫画の二つの起源が、そのまま風刺漫画の短所にもなつてい

るような気がします。過剰な暴力性でもつて弱者をつるし上げる怖さと、不満のガスを抜くだけで現状を肯定してしまう弱さ。これは今の風刺画やプロパガンダの持つ問題へとほぼそのまま継承されていますね。

◆問題自体ではなくそれについて書かれたものを話し合う方が面白くなつてきてしました。

齋藤 風刺画は作者の意図に反して読まれることもあると思うんですね。

Review of reviews は中間層を相手にしている訳で、読者層が幅広いことによつて読まれ方に違いはあつたのでしようか？

橋本 それはあつたと思いますが、今のような炎上のような論争や抗議はあ

んまりなかつたようです。一九三〇年代ぐらいから読者投稿漫画が盛んになるんです。日本も一緒なんですが、自分で書いて投稿して採用されると感謝進呈、というのが盛んになる。それだけ漫画が人気になつて書く人も増えてきたから。そんな風に描く機会や発表の場が増えて、相手の風刺漫画を批判するだけじゃなくて、それぞれ自分の立場で風刺漫画を描いて反撃するとします。

斎藤 新聞では同じ情報を共有して、ツイッターも同じプラットフォームではありますが、人によってパーソナライズされた情報だけを受け取るから、同じプラットフォームでも性質が違うと思います。それで、バンクシーの医療従事者の作品は素直に医療従事者を

褒め称えて応援しているように読む人もいれば、結局は他の今まで遊んだヒーローと同じ様にゴミ箱に入れるから結局はそういう風に扱われるよつていう風に読む人もいる。そうやって読み方が分かれることをバンクシーは狙っていたかもしないし、別に狙つていなかつたかもしないんですけど。そういうことを新聞であればみんな同じよう記事として見て、その意味を語り合えたかもしれないけど、ツイッターダと語り合えるのかなとか、そういう違いがあります。先生はバンクシーの医療従事者の作品についてどう思いましたか？

橋本 あのバンクシーの医療従事者の作品はよくできっていて、とても両義的ですよね。医療従事者はヒーローだ、いや正義の味方のように何かを壊すのじやなくて、傷ついた人を癒すから、これまでとはまったく違うヒーローだというように価値観の転換を示している。その一方で、この子も、いつかは飽きて、この新しい人形を古い人形と同じように放り投げるともとれる。所詮は流行りもののキャラクターとして消費しているだけで、消費する構造は変わらないんじゃないかという、もう一つの見方も可能。ある種の文学作品とよく似ていて、力強いのにどつとも取れる曖昧なところが残されている。現代的だなと思うのは、あのバンクシーの絵から医療現場を改善していくうという動きはあまり出てこなくって、むしろその絵や行動の解釈の方にみんなが夢中になつてゐるところ。今の新聞やテレビと似てて、それ自体の内容よりも新聞とかをネタにして語り合うほ

うが楽しい。

齋藤 風刺画が生まれた頃と同じですね。

橋本 そういう点ではむしろ先祖返りしたときえいえるかもしれない。みんなでワイワイするためのネタだけのために消費されてる。それこそ人形をとつかえひつかえして遊んでるバンクシーの絵の子どもと一緒に、あれが医療従事者をリスクしてるかどうかを議論している限り、医療従事者はずっとあのままでよね。議論ばかり楽しんで、現状がそのままというのは、いわば風刺画の伝統にたつてている。せっかく現状を見直す視点を提供してくれているのに。

齋藤 起源の話で言っていたイギリス型ですか。

橋本 そうそう。じやあ実際に待遇や

状況をどういう風に変えていくのかといふのは、たしかに別の話だけど。ただ、それについて話し合うことの方はつかり面白くなってきたというの、大きな変化でしょうね。事件そのものを深く論じるよりもその事件について書かれたものを、どっちが正しいか正しくないかについて話すみたいな。医療従事者のことを話すよりバンクシーのあの絵を話す方が楽しいし楽でしょう。医療従事者をどうするのか本当は話さなきゃいけないのに。意地悪な言い方をすれば、あの作品を見ているとそういう面倒くさいことを話さなくて済むわけです。実際、医療従事者の待遇をどういう風に改善していくべきなのかという話は、面倒でしょう。待遇や予算、ボランティアを含めたシフトとか、部外者がツイッターでやつても

盛り上がらないでしょ。でもあのバンクシーの話題があると、そういう面倒なことを考えずに、でも社会のことを考えているような高揚感をもつて、多分一週間ぐらい楽しく議論しながら生きられる。

一同 そうですね。（笑い）

橋本 そういう点で、風刺画の現状肯定の弱さがよく出てるかもしれない。シャルリーエブド事件も同じ。問題自体よりあの事件について話すほうが、はるかにそのことについて論じるより盛り上がる。イスラムをどういう風に考えるかって言つたら予備知識もないし地雷がたくさんあるしですごく大変。でも、事件だけだつたらみんなで盛り上がる。風刺画とかあいのジャーナリズムは、ツイッターとかSNSが盛んになつた以上、そういう場に受け

る分かりやすいネタや敵を作ることじ

やなくて、弱者を標的にすることなく、この次にどうしたらいいのか、そういうことをじっくりと取り上げるべきだ

と思うんですよね。でも結局、ネタと敵を見つけることばかりやつてる。

斎藤 そうですね、世論は喚起できて

いるけれど。

橋本 非常に残酷な話だけど、世論の喚起ってツイッターのトレンドと似てて、それだけじゃ相手任せでほとんど意味がない。そのあとが大事なんだけど、行政を動かすのってすごい面倒くさくて、一般人にはふつう、何もできない。

斎藤 中間層は中間層で変わらないといふことですか？

橋本 もちろん、どういう人を政治家として選ぶかというのがあるし、自分

の選挙区の議員に働きかけるという方

法はあります。でも、そういう地味ながら肝心なことはあまり議論されないですよね。結局、その時その時に、ツイッターで炎上させるようなことを言う人や、私たちがいいねと思えるようなことを言う人ばかりにすぐ話題が移

つて注目が集まってしまう。これじゃポピュリズムって言われるでしょうね。

斎藤 なことを言つてから、マスコ

ミばかりを批判してもしようがないし。

そんな風にマスコミをSNSのネタと

してしか、みないようになっちゃつて

るし。

斎藤 そういう態度が現代的ですよね。

橋本 正直、百年前の風刺画なんて一つ一つ見てもつまんないんだけど、五十年まとめてみてみると、いろいろ面白い問題が見えてくるし、現代に対する見方もずいぶん変わつてくる。いまここからちよつと離れて、古い資料をず一つと見ると、それこそ風刺漫画のような視点で現代を眺めるところがあつて、意外つながりや奇妙な相違点が見えてくるのかもしれません。

橋本 とですね。

橋本 そうですね、そういうのを私たち自身が望んじやつてるから、マスコミばかりを批判してもしようがないし。

そんな風にマスコミをSNSのネタと

してしか、みないようになっちゃつて

るし。

斎藤 そういう態度が現代的ですよね。

橋本 正直、百年前の風刺画なんて一つ一つ見てもつまんないんだけど、五十年まとめてみてみると、いろいろ面白い問題が見えてくるし、現代に対する見方もずいぶん変わつてくる。いまここからちよつと離れて、古い資料をず一つと見ると、それこそ風刺漫画のような視点で現代を眺めるところがあつて、意外つながりや奇妙な相違点が見えてくるのかもしれません。

(1101)〇年八月三十一日収録)

聞き手：齋藤雅泰（外国語学部中国語専攻三年）、吉田唯（文学部比較文学専修三年）、金子明日香（外国語学部ヒンディー語専攻二年）、鷹取令（文学部英米文学英語学専修二年）

修二年）、金子明日香（外国語学部ヒンディー語専攻二年）、鷹取令（文学部英米文学英語学専修二年）

かれている。新公論社発行。「月刊の百科全書」と称して内外の新聞雑誌の論説を転載した「万報一覧」欄が売物となつた。

* 4 *The Strand Magazine* 一八五一年イギリスで創刊された一般向け雑誌。

コナン・ドイルが寄稿していたことで知られる。一九五〇年に廃刊。

* 5 *Punch* (『パンチ』) 一八四一年に創刊されたイギリスの週間風刺漫画雑誌。

に創刊されたイギリスの週間風刺漫画雑誌。

* 6 ルジ・ヨーハンショタル

Leni Riefenstahl [1902~2003] ドイツの女性映画監督・写真家。ナチス政権

期に活躍、ベルリンオリンピックの記録映画『オリンピア』、ナチスの党大会

の女性映画監督・写真家。ナチス政権

期に活躍、ベルリンオリンピックの記録映画『オリンピア』、ナチスの党大会

の女性映画監督・写真家。ナチス政権

期に活躍、ベルリンオリンピックの記録映画『オリンピア』、ナチスの党大会

の女性映画監督・写真家。ナチス政権

期に活躍、ベルリンオリンピックの記録映画『オリンピア』、ナチスの党大会

の女性映画監督・写真家。ナチス政権

* 7 『ハワイ・マレー沖海戦』 一九四二年公開。山本嘉次郎監督。特殊技

術監督として田谷英二が参加。出演、伊藤薰、大河内伝次郎、原節子ほか。海軍省の後援により制作された国策映画。

* 8 古閥裕而 (こせき・ゆうじ)

[1909~1989] 作曲家。歌謡曲・放送音楽などの作曲で活躍した。作品に「船頭可愛や」「長崎の鐘」など。

* 9 近藤日出造 (こんどう・ひでぞう) [1908~1979] 漫画家。岡本一平に師事したのち、読売新聞社において政治風刺漫画を多数執筆した。後進の指導に尽力。

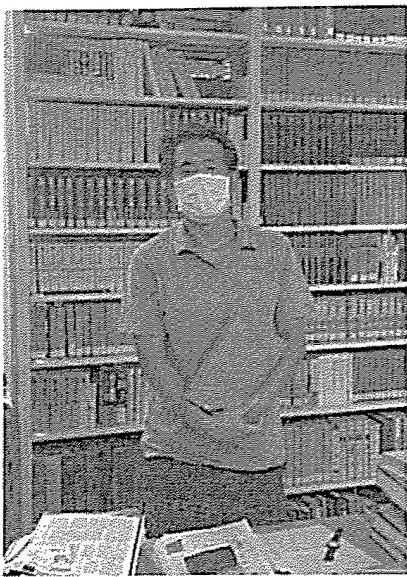
* 10 大平正芳 (おおひら・まさよし)

一月創刊、一九二一年九月までが確認

の罪で投獄されるが無罪となつた。の

〔1910～1980〕政治家。外相・蔵相などを経て、一九七八年首相。二年後不信任案可決で衆議院を解散、総選挙中に死去。

* 11 デヴィッド・ロウ 一九一〇年
代の世界的人気漫画家。現代の政治漫画の原型を作った。



橋本 順光（はしもと・

よりみつ）

大阪大学大学院文学研究科教授。1970年生まれ。京都府出身。1904年大阪大学文学部卒業。2001年東京大学総合文化研究科地域文化研究博士課程中退、2001年横浜国立大学教育人間科学部専任講師、2004年同大助教授。2008年3月ランカスター大学Ph.D.（歴史学）取得。

デビュー。代表作は「団子串助漫遊

た。

記」。江戸の庶民文化を研究し、「文楽人形」「江戸小咄集」などの著作がある。

* 13 『隣組』 昭和前期の日本の流

行歌。作詞岡本一平、作曲飯田信夫。隣組制度を啓蒙する内容。一九四〇年から放送。

* 12 富尾しげる [1902～1982] 漫画家、江戸風俗研究家。岡本一平に師事。大正十一年「東京毎夕新聞」に子供向け物語漫画「漫画太郎」を連載し

* 15 『タンタンの冒険』 ベルギーの漫画家セルジュ（1907～83）が一九二九年に生み出した冒険漫画シリーズ。Gilray [1757～1815] イギリスの漫画家。刻字、印画術に従事した後、政治風刺漫画の才能を發揮した。ジョージ・ジョージ・マクマナスによって作られたアメコ。一九一三年から一九〇〇〇〇年までの八七年間にわたって放送され

* 16 ジェイムズ・ギルレイ James Gillray [1757～1815] イギリスの漫画家。刻字、印画術に従事した後、政治風刺漫画の才能を發揮した。ジョージ・三世をはじめ王族、ナポレオン一世、小ピットなど当時の知名人および社会の風習を風刺した。